

神奈川県立近代美術館・鎌倉に 耐震問題

文・写真 西澤美子



新館使用中止、本館を有効利用

神奈川県立近代美術館・鎌倉の新館展示室が、建物の鉄骨柱の腐食により大地震の際には安全上問題があると、九月十五日から閉鎖されている。新館は本館と同じ坂倉準三建築研究所の

横浜トリエンナーレ2008 公開シンポジウム開催

11月18日、東京・赤坂の国際交流基金国際会議場で、横浜トリエンナーレ2008公開シンポジウム「国際展にいま問われているもの」が開かれた。パネリストは総合ディレクターの水沢勉氏とドイツのD・バーンバウム、スイスのB・ルツらキュレーターの5氏。2008年9月13日から開催される同展の中間報告として、メイン会場には新港ふ頭を5,000㎡の仮設会場を新設することが決まり、建築家の西沢立衛氏のアドバイスを待って設計の最終段階に入っていること、参加70作家のうち約30名が決定していることが発表された。また、世界で100以上ある国際展の現状や各都市間での連携の重要性が話し合われた。



第11回ヴェネチア・ビ建築展、 テーマは「EXTREME NATURE」

9月から指名コンペティションで選考を重ねていた、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展・日本館展示のコミッションナーが建築評論家の五十嵐太郎氏に決定した。「EXTREME NATURE」がテーマ。出展作家は建築家の石上純也、植物学者の大場秀章の両氏。温室という万博の起源に立ち返りつつ、極端な性質の建築が最先端の自然環境を生み出す「始まる建築」を試みる展示となる（写真はプランイメージ）。建築展の開催は2008年9月～11月を予定。



「アートフェア東京2008」の 出展画廊等が決定

今年で3回目を数えるアートフェア東京2008の開催日時と、出展する画廊が決定した。「日本における芸術産業の創出」を目指すというアートフェア東京の詳細は次の通り。日時：2008年4月4日（金）～6日（日）、会場：東京国際フォーラム展示ホール1、入場料：一般1,500円、アドバイザー：白石正美、エグゼクティブ・ディレクター：幸美沙、出展：108画廊（うち、海外：7画廊、初出展：19画廊）。



設計で一九六六年に開館。十二本のコルテン鋼の柱が建物全体を支えている。美術館を管轄する県教育委員会によると、そのうち九本の柱の厚みが一〇%以上薄くなっていることが県の耐震調査

で明らかにされた。「今後の対策は検討中」（同館山梨副館長）だ。県教育委員会教育局の三角秀行部長は「国の史跡に指定されている鶴岡八幡宮の境内にあるので文化庁長官の許可がなければ大規模な改修工事はできない」という。文化庁記念物課では「現在、城跡などの史跡に建つ学校などの公共施設でも耐震工事が多く行われている。利用者の安全性の問題であれば改築の申請は許可される場合が多い」としているが、古都保存法による建物改築の制限、八幡宮との借地契約の問題など「複雑な条件があり、それらを整理している。短期間で結論は出ないだろう」（山梨副館長）という。

同館では九月十五日以降の展覧会を本館の貴賓室を利用するなどして開催、今後も「本館を有効に活用して予定通り開催する」（山梨副館長）。貴賓室は五一年の本館開館当初は展示室だった。山梨副館長は「原点に戻り、葉山館を含めた美術館全体の活動を見通していきたい」としている。

同館は日本で最初の近代美術館であり、本館の建物は重要なモダニズム建築の調査、保存を促す国際組織DOCOMOの二十選に選ばれ、昨年、新館も加えることが承認された。また両館で日本建築家協会二十五年賞を受賞している。新館は二代目館長で日本の近代美術館の基礎を築いた土方定一の「景色と一体化した空間が欲しい」というコンセプトを元

に、池に面した広いガラス面が設けられた経緯があり（建築ジャーナル 九四年六月号より）、美術評論家の北澤憲昭氏は「彫刻と環境の問題がクローズアップされていく時代に美術館という箱がオフギャラリーの傾向を取り込んだ先駆け」と見ている。

鎌倉館の存続を願って設立された「神奈川県立近代美術館100年の会」事務局局長で建築家の兼松敏一郎氏は、「新館は日本の近代美術をリードしてきた近美の役割を伝える上でも重要だ。建築としての価値や美術館が果たしてきた役割を明確にして地主の八幡宮や文化庁に働きかけ、再開を目指して欲しい」と言う。近年、重要な近代建築が取り壊されていく状況の中、本館より軽視されがちな新館の存続が危ぶまれる。坂倉建築研究所では「新館と本館で坂倉の初期と晩年の対比が見られ、周辺の風景にも溶け込んでいる。もう少し詳細な調査を行い、技術的な対策を検討することが必要ではないか」（北村紀史氏）と話している。